第15章

附属図書館

1　前史

（1）明倫堂と卯辰山養生所 ……1156
（2）師範学校と暁烏文庫 ……1156

2　金沢大学附属図書館の発足

（1）中央館の開館 ……1158
（2）三十間長屋における暁烏文庫図書室の設置 ……1159
（3）附属図書館の事務機構 ……1160
（4）マイクロ複写装置の設置 ……1160

3　二の丸の図書館

（1）新図書館の建設と分室設置 ……1162
（2）大学紛争と図書館 ……1163
（3）図書館報『こだま』による広報活動と他館相互協力 ……1163
（4）事務機構の改革と業務の電算化 ……1164

4　角間への移転

（1）新図書館の竣工とその概要 ……1166
（2）図書館の運営方針策定 ……1167
（3）移転作業と新館の開館及び部局図書室の統合 ……1168

5　医学部分館と工学部分館

（1）医学部分館 ……1170
（2）工学部分館 ……1172
（3）薬学部図書室 ……1174

6　図書館機能の整備とサービスの充実強化

（1）大学図書館サービスシステムの充実 ……1176
（2）マルチメディア・コーナーの充実 ……1177
（3）資料の遡及入力事業と学生サービスの向上 ……1177
（4）広報活動・休日開館 ……1178

7　図書館の行事

（1）暁烏文庫古典講座・暁烏記念事業 ……1179
（2）金沢大学附属図書館シンポジウム ……1180

附　録……1182

1　前史

（1）明倫堂と卯辰山養生所

1792（寛政４）年の創立時における明倫堂の職制は次のようである。職員として、総裁（執政、参政）、定火消、学校頭、横目、総裁席執筆、学校頭席事務係、書写役、書籍出納役、学校頭席溜書。教員として、学頭、都講、助教、読師、皇学教師、歌学教師、天文学教師、算術教師、易学教師、医学教師、礼法教師。明倫堂は1803（享和３）年と1839（天保10）年の２度の学制の改革を経る。このうち1839年の改革では督学、教授、助教、助教加人、訓導、訓導加人、訓導格、訓蒙、句読師、書写方、御書物出納方、学校御横目の役職が挙げられる。

また、1867（慶応３）年創設の卯辰山養生所に始まる医学校の歴史は、1870（明治３）年の医学館の開校で本格化するが、医学館の組織は次のようである。総督医、教師、助教医、通訳、理化係、薬局監察、翻訳校合係、器械方、解剖係、器械手伝、副直、薬局係、書籍出納係、種痘係、幹事、監定、種痘方、採漿。

以上『加賀藩ノ学制ト教育』（戸水信義）によるが、『石川県教育史稿』には藩政時代の学制の部分は、この『加賀藩ノ学制ト教育』に準拠しているとその緒言にある。

この中で、図書館職員と見ることのできる「書籍出納役」「御書物出納方」「書籍出納係」の役職名を見い出すことができる。なお、前身校である第四高等学校、石川師範学校、金沢医科大学等の旧蔵書の中に「卯辰山養生所」「金沢学校」「學校」などの蔵書印を見ることができる。

（2）師範学校と暁烏文庫

1947（昭和22）年春、石川師範学校（弥生町）と金沢高等師範学校（野田町）がともに暁烏敏師所蔵の香草文庫の寄贈を申し出た。これに対して師は、書物を収納する書庫について尋ねられた。この時石川師範は、書庫を新築しこれを迎え、金沢高師は旧兵舎を校舎にしていたので構内の火薬庫をこれに充てると意思表明した。金沢高師、石川師範いずれとも確定せぬうち、塩野金沢高師学校長の公職追放による退職などの事情もあって、石川師範がもらい受けることとなった。早速この年の８月12日から暁烏家に事務員（市川三郎氏ほか）を派遣し図書カードの作成を始めた。

次に掲げるのは、当時配布した「暁烏文庫設立趣意書」である。

暁烏文庫設立趣意書

日本再建の根底は学問、教育及び文化の振興にあることは申すまでもありません。この四月から発足した六・三制は国民生活の民主的改造を企図するものでありまして、新教育は学校教育と共に社会教育を重要視し、これがため各種図書館、博物館等の必要が叫ばれて居ります。然しながら現下の日本にとって新たにこの種の施設を整備しようとすることは容易なことではありません。従ってそれだけその困難を冒してこの事業を遂行し、真に地方文化の再興を図ることは極めて意義あるものと信ずるのであります。

然るにこの程、我国宗教界の偉人として全国に教化の徳を布かれた暁烏敏先生が、多年に亘ってその浄財を投じて蒐集せられた５万冊に上る大蔵書を、後学の為、挙げて石川師範学校に寄贈の内意を示されたのであります。この蔵書は仏教、基督教等の宗教書を初めとして、哲学、文学、歴史、地理、法律、経済、社会、道徳、教育、美術、音楽、自然科学等殆んどの学問の全分野にわたる各種書籍を網羅しており、曾ては先生がこれを内容とする大図書館を建築し、それを中心とする日本文教院の設立を企てられたほどの、今日に於いては洵に得がたき貴重なる文献であります。

われ等は先生の崇高なる精神に感激しその鴻志に報いんがため、茲に左記の如き暁烏文庫を設立し教育家、宗教家並びに一般有志に公開して学術研究と地方文化の啓発上に資し、併せて学芸の府たるの実を具え以て時代の要請にそわしめんとするものであります。

冀くは大方の諸士、明倫の伝統に輝く文化石川に於ける研修の道場として暁烏文庫を中心とする一大研究期間実現のために、深き理解と厚き同情とを寄せられて何分の御協力御援助あらんことを衷心お願いする次第であります。

昭和22年８月１日

暁烏文庫設立委員会

石川師範学校長

石川師範学校同窓会長　　清　水　暁　昇

石川県教育会長　　染　村　亀　鶴

石川県仏教会長　　曄　道　文　芸

暁烏家所蔵の香草文庫を新たに「暁烏文庫」の名称で、石川師範男子部構内（金沢市弥生町）に書庫は５間に７間の石造２階建て、ほかに木造の閲覧室やホールも建てることとし、これに要する経費約550万円は、広く浄財を募ることとした。

1947年の秋から1948年にかけて師範の全教職員は、自らの俸給の１ヵ月分を文庫設立

のため拠出するとともに、手分けして募金に尽くした。しかし、総額70万円余にしか達しなかった。ゆえに当初の規模を改め、師範学校男子部附属小学校前庭（現弥生小学校校庭）に木造モルタル２階建ての書庫を竣工、1948年11月３日暁烏文庫落成式をした。しかし、終戦後の学制過渡期にあって、学校がどうなるかという懸念から、図書を搬入することができなかった。翌1949年石川師範は金沢大学教育学部となり、石川軍政隊（Ishikawa Military Government Team）の命により学部の城内移転が決まり、ようやく1950年４月25日からの搬入の運びとなった。場所は第九師団跡の三十間長屋である。これが暁烏文庫の書庫となった。弥生の書庫は当初の目的のために使用される事はなかったが、1986（昭和61）年まで弥生公民館として使用、社会教育・地域文化の発展の場として活用された。

2　金沢大学附属図書館の発足

（1）中央館の開館

国立学校設置法の公布によって、1949（昭和24）年５月31日金沢大学が設置された。それとともに、その母体となった金沢医科大学並びに第四高等学校、金沢医科大学附属薬学専門部の図書館・図書室が包括統合され、金沢大学附属図書館が設置された。

これに先立つ1948年11月16日、大学設置委員の実地調査があり、大学の創設に当たって「(2) 社会科学関係の図書を増強すること」（『事務通報』１～10:1950.２）の条件が付された。

翌1949年１月１日付けで、附属図書館設置準備委員会が設けられ、当時第四高等学校教授であった神保龍二・大沢衛の両氏を委員長及び副委員長として、附属図書館にかかわる諸準備が進められた。設置に際して医科大学附属図書館及び各校の図書室をどのように組織し、運営するかについて慎重に協議した結果、附属図書館として理想とする中央図書館制とすることとし、中央館と１分館（医学部）６分室（法文・理学・教育・薬学・工学・高師）を置くこととし、分館分室はそれぞれその所属の部局に、中央館は暫定的に教養部に置くことにして発足した。

初代館長には、1950年１月４日付けで設置準備委員長として活躍した神保龍二教授（法文学部）が就任し、体制が整った。

なお中央館での利用者サービスは、館内閲覧を1949年９月１日から、館外貸出は10月１日から開始した。

（2）三十間長屋における暁烏文庫図書室の設置

石川師範学校の教職員や師範学校同窓会及び在校生の努力で、石川師範学校男子部構内に暁烏文庫受け入れのための書庫が落成したが、戦後の教育制度の改革に直面し、ここへは文庫を運び込むことができなかった。師範学校の大学昇格問題が石川学芸大学構想から総合大学教育学部構想に落ち着き、1949年金沢高等師範学校、石川師範学校、石川青年師範学校が金沢大学教育学部として発足し、教育学部の城内への移転が決まって、改めて暁烏文庫図書室を建築する必要が起こった。暁烏文庫図書室は、三十間長屋を改造して書庫とし、文部省からの予算187万円で閲覧室・事務室などを新築した。閲覧室と書庫を結ぶ渡り廊下の工費26万円は、石川師範学校の卒業生の寄付によるものである。

建物のスペースは108.5坪で、１階はロビー・記念室（事務長室）・事務室・用務員室、２階は閲覧室・特別閲覧室（館長室）で、渡り廊下の２階が出納室になっていて書庫へは出納室から出入りした（『事務通報』１～２:1950.３）。

暁烏敏は文庫の寄贈に当たって

「よみたしとあつめしふみをのちにくる人にのこしてやすく世を去る」

と、和歌を付けて図書を送り出した。附属図書館では、この和歌を記した蔵書票を作り文庫のすべてに貼付した。

1950年４月29日、香草文庫が明達寺暁烏敏個人の所有から、暁烏文庫として正式に金沢大学の蔵書となったことを記念する式典が開かれた。この席で戸田正三学長の提案で４月29日を「暁烏記念日」とし、毎年記念式及び講演会と論文の募集を行うことが決められた。また、「金沢大学暁烏文庫委員会規定」を定め、暁烏文庫に関すること及び記念式・講演会の開催などについては、暁烏委員会によって定められた。以来記念式と講演会は現在も続いているが、論文の応募は1951年に始まり、応募の対象を金沢大学の学生だけではなく、広く一般の人々を含めた時期もあったが、1985年中止するに至った。

戸田学長は、暁烏文庫由来記を草し深い感謝の気持ちを記している。

暁烏文庫由来記　　よみたしとあつめしふみをのちにくる
　　ひとにのこしてやすくよをさる

暁烏敏先生は宗教界の偉人なり。幼より深く学を好み、博く書を読み、古今東西の貴重なる典籍を集むること五万余冊、香草文庫と称してこれを愛蔵す。戦後感ずる処あり、金沢大学の創設に当り　頭書の和歌を添えて寄贈せらる。けだし、後進誘益に外ならず。ここにおいて、本学は三十間長屋を書庫に充て閲覧室を新築して暁烏文庫を完成す。時に昭和二十五年四月二十九日なり。この日を以って暁烏記念日と定め毎年行事を営み、先生の高風をしのぶ。昭和二十九年八月先生入寂せらる。誠に巨星地に落つの感あり。ここに暁烏文庫の由来を略記し、長く先生の遺徳を称えんとす。

昭和三十三年四月二十九日　　金沢大学長　戸田正三

梅が好きな敏を偲んで、書庫を梅の香で包もうと200本の梅の木が、書庫の周囲に植えられた（野本永久『暁烏敏傳』:1974）。

（3）附属図書館の事務機構

暫定的に教養部内に設けられていた中央館は、この本丸に建設された図書室の竣工によって1950（昭和25）年４月30日をもってこちらへ移転し、不十分ながらも新しい規模で中央館としての業務を開始した。

発足当時、中央館の事務部は図書館長と事務長、その下に庶務係、司書係の２係であったが、1960（昭和35）年４月１日、司書係が目録係と閲覧係に分離し３係となっている。

図書館の運営は、「図書館委員会規定」（1950年５月２日）の制定により、図書館委員会の審議を経て行われることとなった。

また1952年３月末日、高師廃止に伴いその分室は中央館に吸収され、５分室となった。

（4）マイクロ複写装置の設置

1954（昭和29）年５月に文部省から、北信越地区マイクロフィルム・センター館の承認を受け、すぐにマイクロ複写委員会を設け、撮影機などについて調査検討を始めた。

その調査結果を踏まえて、翌1955年12月特別予算で、35mmマイクロフィルム撮影機

想い出の記

雑　　感　　元図書館長　進藤　牧郎

1981（昭和56）年、館長になったとき、四高や医大以来集められていた、たくさんの貴重な文献や資料が大事に保管されているのをこの目で見て、本当に感謝しました。

わずかな数の職員の皆さんが、教官や各研究室のそれぞれの必要からでしょうが、いわば勝手に集めたものを体系的に整理・保管するばかりでなく、教官や学生にまでサービスするので大変です。手書きでカードを作っては、その本を書棚に運んで整理し、貸出もするのですから。私もやっとワープロを手にしたころでした。なんとしても、図書館の近代化と効率化を図らなければ。でもその過渡期には職員の皆さんに過重な負担がかかることは目に見えていました。それでも図書館の近代化は避けられないでしょう。文部省も予算を付け、北陸地区諸大学のセンターにすると言うのです。

私の館長のときはこんな時代でした。理科系の学部は積極的でしたが、たくさんの資料や文献を必要とし、整理・保存しなければならない文系の学部が反対なのでした。若い先

が購入された。機種はドイツ製ルーモプリントマイクロスタットMT－I型が選ばれた。

設置場所については、中央館のスペース及び改装予算の都合上、暫定的に医学部電子顕微鏡室の一部を模様替えして複写室に充てた。当初は専任職員の配置がなく医学部職員が兼務し、1956年３月16日から文献複写業務を開始した。

写真１５－１　昭和46年増築時の図書館（丸の内）

1959年３月１日「金沢大学附属図書館マイクロ複写取扱内規」を、続いて８月１日「金沢大学附属図書館マイクロフィルム撮影取扱規程」が制定され、９月には複写専任の職員が配置されて、複写業務はようやく軌道に乗った。

生方は、それほどではなかったと思いますが、教授会は賛成しませんでした。私とてコンピュータがどんなものかさえ分からないのです。それは今もってですが、どんなにしても、必要なことは分かります。「次の館長はどうしたってコンピュータの分かる方を」と、学長にお願いして退任しました。ご苦労をおかけしたのは職員の皆さんにです、相済みません。新しい角間の図書館が立派に完成したのを見るたびに思いを新たにします。

半世紀前、ドイツのケルンに居ました。大学と州と市とで立派な図書館を持っていましたが、規模が大き過ぎて、貸出にもコピーを取るにも時間があまりにもかかります。大きいだけが良いとは限らないとつくづく思いました。金沢には市立・県立そして大学と図書館が分かれているので、利用者にはちょっと不便のように思いますが今はハイテクの時代ですから。大学の図書館は角間にあるだけに、研究・教育専門図書館としての役割を是非とも果たしていただきたいと思います。研究者や学生ばかりでなく、市民にまでも利用できるようなオープンなシステムを、今はやりのインターネットを使ってつくりあげるようにお願いいたします。

3　二の丸の図書館

（1）新図書館の建設と分室設置

城内整備計画の一環として、附属図書館新営工事の起工式が1964（昭和39）年９月１日、旧金沢城二の丸跡の第九師団司令部と五十間長屋跡の間で行われ、1965年３月、待望の新図書館が竣工した。竣工式は同４月16日に行われた。設計は（株）教育施設研究所（東京）、総工費6,260万円、建築工事は（株）浅沼組、電気設備工事は竹下電気（株）、給水排水暖房設備工事は北菱電興（株）、屋外給水・ガス引き込み工事は昌和管工（株）。鉄筋コンクリート３階建てで、書庫部分は積層式４層、延面積2,368m²、うち閲覧室など1,449m²、書庫918m²、座席数212席と旧館の３倍に増加した。

１階は玄関を入ってすぐに貸出カウンターと閲覧室、目録室、２階は閲覧室と館長室、事務室、３階は閲覧室、会議室、複写室などが設けられた。暁烏文庫を含む三十間長屋内の図書約10万冊、仙石町の理学部の旧制第四高等学校の図書約10万冊、計20万冊が移転対象であった。移転作業は1965年７月１日から７月31日にかけて行われたが、現在のように搬送用の機器が発達していなかったため、困難を極めた。８月１日からは事務を開始、８月23日から閲覧業務を開始した。

その後、学生数の増加と蔵書数による必要面積の補正などにより、1,929m²の資格面積が生じたので、1970年に増築工事が行われ、12月15日竣工、1971年１月23日に竣工式が行われた。閲覧室と書庫が増設され、延面積は4,299m²、座席数は532席となり、書庫の収容能力は40万冊に増加した。これにより、ようやく大学図書館らしい体裁が整った。

1969年と1970年両年度にわたって、文部省から指定図書制度実施のための予算配当を受け、指定図書制度を実施した。指定図書とは、文部省実施要項によれば、

> 教官が講義等に関連して、学生に必読すべきものとして、多くの場合、試験、演習等の際には、その内容も出題の対象となる『教官指定学生専用図書』をいう。教科書、参考図書は含まない。指定図書制度とは、教官が自らの講義等の内容にしたがって、開講に先立ち、指定図書を附属図書館に備え付けることを求め、附属図書館では、一般図書と区別して配架し、原則として開架閲覧方式により、複本を準備して学生の利用に供するものである。これにより、教官は指定図書の内容を勘案しながら講義等をおこなうもので、教官、学生および附属図書館の三者が一体的関係を保ちながら、教育効果を高めるものである。

本学ではこれに先立ち、既に1964年から図書館近代化の一環として、学内予算によりこ

の制度の実施を始めた。1965（昭和40）年の新館オープンに合わせ、２階閲覧室に指定図書室を設け運用をしてきたが、文部省配当は上記２年度のみであり、以後は学内でも予算確保の望みがなくなり、1974年度以後は、この制度は中止のやむなきに至った。

1969年４月、法文学部、教養部にそれぞれ分室が設置された。法文学部分室は同学部３階の学生控室跡に設置され、本館第二整理係員３名が常駐して業務に当たり、部屋の面積の関係で図書の整理のみを行った。1980年、学部の分離により、文法経済学部分室となった。1985（昭和60）年事務機構改革により、文法経済学部図書室となり、同年８月大学院の設置などにより手狭となったため、図書室は本館３階へ移転しその業務を行った。1989（平成元）年４月、業務を統合し、本館でその業務を行うことになったため、文法経済学部図書室は廃止された。

教養部分室は1955年学生の自習室として設置され、1967年、教養部の新営工事完成により、１階に事務室・閲覧室が設けられた。しかし人員の関係で図書の閲覧のみを開始し、図書の整理は本館において行った。1974年から、和書については同分室で整理、中国語及び洋書は引き続き本館で整理を行った。1985年、事務機構改革により教養部図書室となり、1996（平成８）年４月から教養部の廃止が決定したため、同年２月20日から23日にかけて本館へ移転し、その業務を統合し、教養部図書室は廃止された。

（２）大学紛争と図書館

1966（昭和41）年、大学紛争の波は本学にも押し寄せ、９月共闘派の一部学生が近県大学の同志の協力を得て教養部にバリケードを築き校舎を封鎖した。続いて法文学部、さらに教育学部も封鎖された。この段階で封鎖解除を迫る学生の一派とこれを拒否する学生間のセクトの争いが熾烈となり、火炎瓶の投げ合い、投石合戦が繰り広げられた。９月27日には投石合戦のとばっちりを受け、窓ガラス、街灯などが破損した。図書館では図書にまで被害の及ぶのを防止するため、９月29日から10月28日までの間、やむなくロックアウトを行い、臨時休館とした。法文学部、教養部分室は、学生自治会による校舎の封鎖の解除されるまでその業務を休止するに至った。

（３）図書館報『こだま』による広報活動と他館相互協力

1950（昭和25）年３月１日、図書館月報第１号が発刊され、同年９月に第５号が発行されたが、以後は中断されたままであった。1970年９月10日、『附属図書館月報こだま』第１号が刊行された。利用者の増加と、事務局に図書館の重要性を認めてもらうことをねらって、図書館業務の内容、活動状況をPRすることが主目的であった。体裁はB５版縦書き、４～６ページ立て、月刊を目標にした。『こだま』は図書館から発信された情報が利用者に読まれ、いろいろな形で図書館へ戻って欲しいという願いを込めて命名されたとのこ

とである。題字は藤原公任、藤原行成、紀貫之の集字である。また地模様は縮緬に友禅染を用いて、観世水に桔梗の文様を染めた小袖の一部を使用した。その後1986（昭和61）年第81号から体裁を横組みにし、タイトルの地模様に『人間国宝木村雨山』（フジアート刊）の中振り袖「牡丹」の一部を借用し、紙面を一新した。また1993（平成５）年４月第109号から、タイトルの地模様を由水十久（初代）の加賀友禅染絵「さやぐ・おどる」に変更し、判型をA４版に拡大し、文字を大きく読みやすくした。

1973（昭和48）年９月11日、金沢大学図書館において、金沢市並びに近郊の大学・高専図書館９館の関係者が集い、金沢地区大学・高専図書館の発展を図るとともに、館員の教養と技術の向上及び相互の親睦を図ることを目的として、「金沢地区大学図書館協議会」を発足させることになった。1974年２月28日、会則の審議を行い、第１回の幹事館に本学が選出された。同年９月５日、第１回定例会議が本学で開催され「古文書解読講習会開催」、「金沢地区大学図書館共通利用券の発行」、「金沢地区大学図書館協議会加盟間相互の閲覧利用」、「本協議会の事業」などが協議された。その結果は『金沢地区大学図書館協議会誌第１号』としてまとめられている。なお共通利用券は1975年に作成、加盟館に配布された。以後、毎年定例会議と研修会が開催されている。加盟館はその後増加し、1997（平成９）年現在では15館となっている。

（４）事務機構の改革と業務の電算化

1965（昭和40）年ころから導入されてきた国立大学附属図書館の部課制が、1985年４月１日から、金沢大学を含む３大学でも実施されることになり、初代部長には坂東瑞昭が就任した。整理課には総務係、受入係（新設）、和漢書目録係（旧第一整理係）、洋書目録係（旧第二整理係）の４係が、閲覧課には閲覧係、参考調査係、学術情報係（新設）、工学部分館図書係の４係が置かれた。文法経、教育、理学、薬学及び教養部の各分室は図書室となり、教養部図書室職員は和漢書目録係に、理学部、薬学部図書室職員は閲覧係に、教育学部図書室職員は参考調査係にそれぞれ所属することになった。また、閲覧課に新たに専門員が配置された。1988年、課名が変更になり、整理課は情報管理課に、閲覧課は情報サービス課となった。1989（平成元）年４月、和漢書目録係と洋書目録係を統合再編成し目録係とし、新たに雑誌係が設置された。また学術情報係は名称を変更してシステム管理係となった。

1983（昭和58）年３月「金沢大学附属図書館事務電子計算機処理検討委員会」の設置により、附属図書館業務電算化準備作業が始まり、1983年５月には「金沢大学附属図書館事務電算化実務委員会」を設置し、業務電算化の検討を行った。1984年６月以降、受入図書の備品番号を計算機対応に変更した。また端末機（F9450Ⅱ）を導入し、経理部情報処理課のFACOM/M160（後にM340に変更）と接続して、JAPAN MARCの検索及びカード目録の出力を試行してきた。1985年５月、前記二つの委員会を統合し「金沢大学

附属図書館業務電算化検討委員会」と名称変更。また実務担当者による「附属図書館業務電算化作業班」を設置し、図書館業務の現状分析、電算化対照業務、システム構成などの検討を行い、その結果を「附属図書館業務電算化概要（案）」としてまとめ、1986年１月の図書館委員会に提出し承認を受け、1987年度の概算要求に向けて、業務電算化計画の具体的準備を進めることになった。1986年４月に概算要求を提出し、1988（昭和63）年２月からの借料予算が認められた。電算化の開発方針は計画書によると、

（1）基本的にはトータルシステムを目指すが開発順序としては閲覧サブシステム、目録作成、検索サブシステムを第１期とし雑誌サブシステム受入サブシステムを第２期とする。
（2）電算化の主眼を学術情報センターとの接続により効率的な図書雑誌の書誌･所在情報の形成と提供を実現する。その他の各サブシステムについてはできるだけ簡便なものとする。
（3）新規開発部分の少ないこと。
（4）当面端末装置を設置するのは中央館及び医学・工学両分館であるが、近い将来分館以外の部局に端末を設置した場合、それらの端末装置の接続が可能であり、かつ、適正なレスポンスタイムを維持して運用できる中央処理装置であること。
（5）ソフト、ハード両面の拡張性を重視する。
（6）近い将来における学内LANとの整合性を配慮すること。

であった。1987年１月、機種選定委員会を設置し、計８回の委員会を開催し慎重に検討を行った結果、富士通株式会社製FACOM M730/４型電子計算機を選定し、1987年７月13日開催の図書館委員会に報告、承認された。1987年12月28日、３階印刷製本室に附属図書館業務用電算機（FACOM M730/４）が搬入設置され、1988年２月26日学術情報センターの目録所在情報サービスに接続した。全国で第54番目の接続であった。1990（平成２）年２月１日には学術情報ネットワークに接続した。その後1991年11月電算機をFACOM M730/８に更新した。

文庫案内

『暁烏文庫』

金沢大学の創設にあたり、1950（昭和25）年４月本学に寄贈された。当初、三十間長屋を書庫に充て閲覧室を新築し暁烏文庫完成。同文庫創立記念講演会を開催した（講師・武者小路実篤、藤岡由夫）1965年、二の丸跡に本館が建てられ移管。1989（平成元）年金沢大学の総合移転に伴い角間キャンパスの中央館に三たび移された。

暁烏師は中学二・三年頃から本を集め始めた。衣食の費用を節約して本を買うこともあった。因みに1907（明治40）年の日記には、「書籍代・173円94銭」とあり、この年の収入総額は「600円53銭」で、約３割を本代にあてている。それがいつの間にか５万冊余

りの蔵書になった。寄贈に当って書かれた文章によると、「私は学問のために書物をよせたというよりも、何かしら書物が好きで書物を買い集めたという方がよいようです。（中略）広く世界の知識にふれてゆきたいという傾向をもっていますから、蔵書の範囲も相当に多角的です。」暁烏師の興味の範囲は広く、文庫総冊数約５万冊のうち仏書関係が圧倒的に多く、全体の約４分の１にあたる１万３千500冊を占める、文庫の中から特異と思われるものを若干拾ってみると、まずパリー語、ビルマ語などで書かれた各種の貝葉経があり、十数ヶ国語に翻訳された聖書、紺紙金泥写経などがある。仏教書の内容を知るには、『暁烏文庫仏教関係図書目録』また、『再版仏書解説大辞典・増補１-２』にも一部採録されている。仏経書のほかに、万葉集・古事記・日本書紀についても、明治以後に刊行された書物が、まとまっている。「私は人間である。したがって人間にかかわるすべての領域に興味がある」という言葉が、そのまま当てはまるほど、関心の範囲は広かった。

＊暁烏　敏（あけがらす　はや）1877（明治10）年明達寺十七世暁烏依念の長男として生れる。（石川郡出城村字北安田・現松任市北安田）真宗中学・真宗大学に学び同1897年卒業。中学以来の恩師清沢満之の下で多田鼎、佐々木月樵とともに浩々洞を結成。雑誌『精神界』を創刊、仏教界に大きな刺激を与えた。1951（昭和26）年大谷派本願寺宗務総長に就任、1952年宗務顧問・権大僧正に補せらる。1954年８月27日示寂、法名・香草院釈彰敏。

４　角間への移転

（１）新図書館の竣工とその概要

附属図書館中央館の新館建設は金沢大学総合移転計画事業の一環として行われた。1984（昭和59）年11月、総合移転実施特別委員会に附属図書館長から「附属図書館の新営構想」の報告書が提出され、同委員会の原案として了承された。これを受けて1985年３月、「附属図書館新営構想に関する報告」が将来計画検討委員会で了承され、「附属図書館の新営構想」は具体化に向けて一歩を踏み出した。

その間、1984年６月に図書館委員会の下に設置された附属図書館新営に関する小委員会は、附属図書館の新営に関する必要事項について、1988（昭和63）年７月まで、延べ26回にわたり精力的に検討を行った。その検討内容は、全学の図書館機構、中央図書館の基本構想・新営の要件をはじめ、受入整理業務の統合、移転の進行に伴うサービス体制など附属図書館の組織・管理運営全般にわたるものであった。

1987年に図書館新営のための施設整備費の概算要求が提出され、1988年に建物の予算が付いた。

1988年３月に角間地区で着工された建設工事は、心配された山間地の積雪も暖冬で少なく、順調に進み、1989（平成元）年７月末に予定どおりに竣工し、８月１日に大学に引き渡された。総工費は約18億円であった。

新図書館は、角間キャンパス内の各学部からほぼ等距離でアクセスできるようキャンパスの中央部に位置し、知性の場である大学を象徴する建物として建設された。

建物は鉄筋コンクリート造４階建てで、各階を正方形に近いフロアとし、建物の中央部分は図書館の中核を構成する高い吹き抜け空間にした。また建物の外周には幅３mの空間を設け、建物内部を保護すると同時に、降雨雪時の歩行通路としての機能を持たせた。

照明と空調は、省エネ効果と管理上の省力化を図るため、制御をブロック化して制御盤を事務室に集中配置するとともに、センサーを設けて適正な照度を保てるようにした。

また、LANなどの導入に速やかに対応できるように各フロアには情報用ラックを敷設し、将来の情報ネットワークの拡充に備えた。

利用者サービスは、２階サービス・カウンターで集中的に行えるようにし、利用者の便宜と職員の効率的な配置を考慮した。閲覧室の入り口にブックディテクション・システムを設置し、手続きしない図書の持ち出しを防ぐとともに、利用者が鞄やコート類を閲覧室に持ち込むことができるようにした。

玄関ロビーにはテレビ・FMコーナーを設けて衛星放送とFM放送が常時視聴できるように、またマルチメディアコーナーにはビデオレコーダー、CD・LDプレーヤー、テープレコーダーなどを設置し、最大12人がヘッドホーンで利用できるようになり、新館としての新機軸を打ち出した。

閲覧座席は閲覧室に912席、書庫26席の合計938席となり、学生定員の約18%に対応できることとなった。

図書の収蔵冊数は、固定書架と開架書架とで54万冊、地階保存書庫の電動集密書架で41万冊、併せて95万冊となり、12年後までの増加冊数を見込んだ。

（２）図書館の運営方針策定

新図書館の運営及びサービス計画は、新館開館に間に合うよう図書館委員会で検討が進められ、1989年７月「新館の運営の指針」が了承された。指針の基本方針では「図書館は、大学における教育、研究に必要な情報を収集・蓄積し、それの利用を供することを目的とする、学術情報の拠点である」とし、さらに学内の統合情報ネット・ワークにおける図書館の位置や図書館サービスの拡大・改善に留意して、その機能を十分発揮していくことにあるとしている。

この指針に基づいて「金沢大学附属図書館学術資料等の収集に関する基本要項」、「図書

館サービス実施計画」、「角間新館における資料配置計画」が順次策定された。特に資料の配置については、利用者サービスと図書館経営の点から見て重要であり、旧館では狭隘な環境のため不十分であった図書・雑誌を利用者が直接手に取って見ることのできる開架スペースを大幅に増やすことができた。また書庫内図書の利用も準オープンスペースとしてかなり自由にアクセスできるようにした。

（3）移転作業と新館の開館及び部局図書室の統合

新館への移転作業は、1989（平成元）年２月に図書館委員会で了承された「中央図書館移転実施計画」に基づき実施された。移転実施計画は、基本的な留意点として、①本学総合移転の全体スケジュールを踏まえ、日程及び作業行程は図書館業務の停止期間を最小限にとどめるよう努力する、②文・法・経済３学部の1989年度の学年暦と教育・理学部、教養部の学年暦を踏まえ、それぞれの前期試験時には開館状態にすることとした。

移転作業は第一期移転として、文・法・経済３学部の前期試験が終わった７月26日から開始して、９月９日までに、暫定的に旧館に残置する図書及び旧四高・工専・師範学校図書を除くすべての資料の移転を済ませた。

引き続き第二期移転では、新館地階書庫の電動集密書架が設置されるのにあわせて、11月６日から11月11日までに、第一期移転で残してあった旧四高・工専・師範学校図書の

想い出の記

古典セミナー　　元図書館長　木戸　睦彦

図書館で「古典セミナー」という講座が行われていたことがある。1977（昭和52）年は教育学部の宮本又久先生の「明治30年代の思想状況」と題した話で、中心的に取り上げられた本は、竹越与三郎という人の『人民読本』だった。図書館長をしていたからと言うと講師に失礼に聞こえるかもしれないが、私も出席した。集まった学生はわずか十数名だったが、話は興味あるものだった。『人民読本』は小学校卒業程度の年齢層を対象にした小冊子で、憲法が発布されて人民の権利と自由が保障されていることや、愛国心や軍隊の必要性も謳う等々、極めて穏健な内容の本ということだった。この本は図書館にあったから、借りようと思ったが、学生が借りに来るだろうからその後にしようと考えた。ところが、翌日も翌々日も学生は来なかったので私が借りた。税は議会で決めたもの以外払う必要はないとか、日本人は何人の奴隷でもないとか、その他明治30年代ならともかく、今読めば当り前の話がたくさん並んでいて期待したほど面白くなかった。けれども話を聞きに来たのは少数の意欲ある学生だろうし、年寄りの私ですら感激した話だから、若い学生は当然

移転を行った。

待望の新中央館の開館は、1989年10月11日に行われた。この年には文学部・法学部・経済学部も角間地区に移転したので、角間キャンパスで後期授業を迎えたこれらの学部の学生諸君は早速新図書館を利用して学習することができた。

なお、城内の旧館１階部分を丸の内図書館として開館し、移転時期の遅れる教育学部・理学部・教養部の学生を対象に、角間の新図書館に移さなかった教育学、自然科学、工学、技術、芸術関係の図書約５万冊を中心に閲覧、貸出と新館を介するサービスを行った。同年12月、新館開館記念行事として、学術情報センター安達淳助教授を迎えて「キャンパス情報ネットワークと図書館」と題する講演会が、角間新館AV室で開催された。

1992年、理学部、教育学部の角間キャンパス移転に伴い、理学部図書室（７月）と教育学部図書室（９月）の業務と職員が中央館に統合された。また、同年８月末に丸の内図書館を閉鎖し、中央館移転の経過措置として丸の内図書館に残置してあった教育学、自然科学、工学、芸術分野の図書を角間中央館に移転した。図書館報『こだま』No.107（1992.10.１）には、丸の内図書館閉鎖に当たって1965（昭和40）年から27年間の丸の内図書館について教職員の思い出が特集された。

また、この時点でまだ丸の内地区に残留している教養部学生のために、９月１日から旧丸の内図書館の機能と資料の一部（教養部選定の学生用図書・岩波文庫・岩波新書など）を引き継いで、教養部図書室を模様替えしてオープンした。

感激して読む気になるだろうと思っていたが、そうでなかった。読んでみて面白くなかったら途中で投げ出してもよいが、そこまでする学生も居ないのが何とも情けなかった。古典は「心の糧」である。そうは言っても、今は老人でも「高砂」とか「寿（ことぶき）」の言葉を会合の名前に付けるのを嫌うという話がある。インターネットならすぐに飛び付く若者に「古」の字のついた古典に魅力があるとは思えないが、だからこそ、なおのこと古典に「心の糧」を求めて欲しくもある。今、「古典セミナー」は行われていないようであるが、何とか若者を「古典」に呼び戻すような読書指導ができないものだろうか。私が旧制高校の生徒だったとき、英語の先生から古典を読めと言われたことがある。新しいものは玉石混じっているから選択に迷うが、古典は良いものだけが残っているのだから安心であると言われた。

これを聞いて親友のY君と「岩波文庫を150冊読もう」と約束した。漱石のものなどほかにもあるが、それは岩波文庫に換算して合計150冊ということにしようとも話した。その後、Y君が150冊になったと言ったとき、私は140冊位で一歩遅れていた。そんな若き日のことが懐かしく思い出される。

1993（平成５）年９月、教養部が丸の内地区から角間に移転を終えた。中央図書館では、後期授業から角間キャンパスに登校した教養部学生、専門課程進学者のために図書館の利用方法の説明や館内ツアーを数回にわたって実施した。なお、教養部の角間地区への移転後も教養部内にあった教養部図書室は、1996（平成８）年３月に教養部が廃止されたことに伴い、図書室の業務と職員を中央館に統合した。

図書搬送問題

図書館における図書搬送業務は、図書館と各部局間の図書資料のやり取りを円滑にし、図書館サービスを迅速・効果的に行うため重要なものである。1991年度まで図書館が独自に図書搬送用自動車と運転手を維持していたが、定員削減に伴う自動車運転業務の事務局への集中化により、1992年度から図書搬送業務は全学的運行の学内使送便を利用することになった。

5　医学部分館と工学部分館

（1）医学部分館

沿革

金沢大学医学図書館が発足したのは1923（大正12）年と言えよう。このとき医科大学昇格に伴い「図書館主任」が置かれ、中村八太郎（病理学教授）がはじめて主任に任ぜられた。しかし、正式に「金沢医科大学附属図書館」の制度が確立したのは1926年のことで、初代館長（1926～1930年）には古畑種基（法医学教授）が任ぜられた。この時期に図書館発展の基礎が整い、以後館長はおおむね１期（２年）ごとに交替するようになり、1950（昭和25）年までに上野一晴（生理学）、谷友次（細菌学）、佐口栄（解剖学）、岡本規矩男（解剖学）、古屋芳雄（衛生学）、岩崎憲（医化学）、井上剛（法医学）、大谷佐重郎（衛生学）、岡本肇（薬理学）、石川太刀雄丸（病理学）の各教授が歴任された。

1949年には、新制金沢大学が発足し、これに伴って「金沢医科大学附属図書館」は、新制度による「分館」として、「金沢大学附属図書館」の機構に包含されて今日に至っている。この時期より現在までの分館長は、佐口栄（解剖学：1950～1954年）、井上剛（法医学：1954～1967年）、山田致知（解剖学：1967～1973年）、何川涼（法医学：1973～1977年）、西田尚紀（微生物学：1977～1983年）、米山良昌（生化学：1983～1988年）、根岸晃六（神経情報研究：1988～1992年）、橋本和夫（衛生学：1992～1994年）、福田龍二（生化学：1994～1996年）、田中重徳（解剖学：1996～1998年）、中村信一（微生物学：1998年）、中沼安二（病理学：1998年～現在）の各教授が歴任されている。

当図書館の発足当時は、北陸地区にほかに医科系大学がなく、地域的にも分離している上に、蔵書の性格も特殊で、しかも日本医学図書館協会加盟館として活動しなければならないという条件があった。そのため１大学１図書館という附属図書館の枠内における位置付けを明確にする必要に迫られ、他館の例もあるので1965（昭和40）年以降「医学図書館」と通称することになった。

医学図書館の新築

1969（昭和44）年11月、待望の新図書館が竣工し、1970年６月に開館した。設計は金沢大学施設部施設課、施工は（株）浅沼組、総工費7,531万円。本屋部分は鉄筋コンクリート２階建て、書庫部分は４層の積層式で建てられ、延面積1,824m²、うち閲覧室等297m²、書庫1,087m²、座席数148席と、旧館の３倍近くの大きさになった。

新館開館以降、利用機能充実に即した館内改装を何度か行った。現在は１階入口にサービス・カウンターを設け、来館者案内、リファレンス（文献検索、文献複写）業務、貸出、返却受付などを行っている。この一角に医学文献情報検索のCD-ROMによるMEDLINE、及び医学中央雑誌などの検索コーナーが設けられ、常時利用されている。また民間システムであるJOIS、DIALOGによる情報検索も館員の手で行っている。MEDLINE情報検索は、CD-ROMサーバーシステム導入によって、1994（平成６）年８月から学内ネットワークサービスをも開始している。隣接して学習閲覧室（56席）があり、学生用教科書約9,500冊が開架され、毎年150冊程度の教科書及び参考図書が補充されている。２階には研究閲覧室（72席）があり、内外の新着医学雑誌が随時展示されている。２次資料室には文献検索冊子のINDEX MEDICUS、及び医学中央雑誌が備えられている。ここにはAVブース１台も設置され、ビデオ資料の閲覧もできるようになっている。また、コピー室には電子複写機３台及び簡易製本機が備えてあり、館内資料のコピーや講義資料の製本など研究者、学生諸君の便に供されている。新聞閲覧コーナーも兼ね備えている。１階閲覧室及び２階閲覧室からは書庫に出入りでき、書庫の１層には国内発行の医学雑誌バックナンバー、２～４層には外国医学雑誌バックナンバーが配架されている。これら館内の資料は自由に閲覧でき、館外への貸出は規定により可能である。

新館当時は資料収容に十分の余裕はあったが、もはや30年近く経つ今日、経年による資料の蓄積と、近年になって国内刊行物がB５からA４化の拡大などによって、書庫の収容能力が限度を超えつつあり、資料の有効利用などを考えた何らかの方策を早急に講じなければならなくなってきている。

古醫書目録の刊行

分館には歴史ある医学部前身時代からの医書が研究室などに分散しており、そのほか旧書庫に多くの未整理資料があった。当時（1968年）の解剖学助教授酒井恒先生が古い医書の整理を提唱され、1973（昭和48）年から館員とともに整理に当たられ、1975年８月

21日をもって作業を終了した。

翌年の1976年４月に『古醫書目録』が完成し、関係諸機関に配布された。収録数は、和書が明治以前1,365冊（和綴本）、洋書は1900（明治33）年以前2,119冊から成っている。

1993（平成５）年10月に、金沢医科大学附属図書館創設（1923年）70周年に臨み『古醫書目録－補遺版』を刊行した。これは18年前の目録の続編で、その後研究室などより古医書を収集し、整理編集したものであり、内容は明治以前の和書518冊と1900（明治33）年以前の洋書138冊から成っている。これら目録の発行により日本医史学会会員はもとより、医史学を研究する方々の利用に重宝されている。

CD-ROMサーバーシステムの導入

現在では欠くことのできない電算機による文献情報検索は、当図書館では1980（昭和55）年１月から米国国立医学図書館（NLM）発行のINDEX MEDICUSに登録されている文献を、日本科学技術情報センター（JICST）のJOISとオンライン接続し検索を開始したのに始まる。

1991（平成３）年３月、CD-ROM（Silver Platter社）を導入し、MEDLINE（INDEX MEDICUS）検索がスタンドアロンでできるようになり、それまでのJOISのオンライン文献検索と違って、検索時間や利用料金にとらわれず納得ゆくまで検索できるようになった。

1994（平成６）年３月、CD-ROMサーバーシステムが導入され、同年８月からMEDLINE情報を、サーバーに無停電電源装置（UPS）を付けることにより24時間年中無休で、さらに学内LAN経由で全学に向けてサービスを開始した。このサーバーは、ネットワークOSとしてNovell社のNet Wareを採用した。検索用端末については、各研究室等が既に保有していると思われる、Apple Macintosh、NEC PC-9800シリーズ（及びその互換機）、IBM PC（及びその互換機）の３機種いずれも使用できるものとした。

このサーバーシステムの導入により、複数の端末が接続でき、同時アクセスも10ユーザを可能とし、24時間いつでも検索できることから利用が多く、午前９時台から増え始め、午後４時台にピークを迎えるが、午後11時台までも利用が続けられている。（1995年LOGIN件数調）

現在の端末接続台数は約150台を数えている。

（2）工学部分館

前史

1920（大正９）年、金沢高等工業専門学校の設立に伴い図書課が置かれ、1925年には書記１名、雇員１名が配置され、本格的な図書館業務が開始された。当時の建物は講堂兼図書閲覧室として建てられた155坪の建物の一部に閲覧室部分があり、それに書庫兼倉庫

として建てられた40坪の部分がつながっていた。学則施行細則には「本校所有の図書は総てこれを書庫に蔵す」（第39条）とあり、蔵書は原則としてすべて閉架制を採っていた。蔵書も次第に増加し、1944（昭和19）年、金沢工業専門学校図書課に改称された時には、蔵書32,671冊（うち洋書9,065冊）を持つ図書館となった。

分室から分館へ

1949年金沢大学が創設されると、附属図書館の下に全学の図書館が統一され、職員も附属図書館に吸収され、金沢大学附属図書館工学部分室となった。創設当時の工学部分室には事務主任が配属され、その下に３名の職員が配置された。施設は旧高専時代の建物をそのまま使用していたため、蔵書増、利用者増によって書庫も閲覧室も狭隘状態となっていたが、1969（昭和44）年工学部校舎の近代化が完成し、図書分室も中央管理棟の一角に移転した。

新営施設は積層３層の書庫（432m²）、閲覧室（307.2m²、70席）、事務室（51.2m²）から成り、蔵書は60,757冊（うち洋書19,700冊）であった。こうした中で、1970（昭和45）年２月、「附属図書館に置く、分館の設置、廃止、統合の名称変更」について文部省大学学術局より通達があり、1972年10月工学部分室の分館昇格が実現し、翌年４月事務主任制に代わって係制が導入された。

図書館機能の近代化

新図書館では、全利用者への書庫の開放、工学部共通図書費による開架学習参考図書の充実が図られ、1974年には時間外開館が実施されるなど、図書館近代化が着手されていった。1980年代に入って本格化した図書館電算化の動きの中で、工学部分館では1988年、中央図書館とともに閲覧業務及び目録作業の電算化が開始された。1990（平成２）年には、オンライン目録検索（OPAC）の効率アップを目標に書誌データの遡及入力が開始され、1992年には、図書館間相互貸借・複写業務（ILL）が電算化された。また、同年には土曜開館が実施に移され、利用者に一層の便が図られた。さらに1996（平成８）年には、分館内配置図書のすべての書誌データの遡及入力が完成し、また学内LANを通じて中央図書館所蔵のCD-ROMデータベースの検索が可能となった。

こうした図書館機能の近代化は分館のサービスの内容にも大きな変化を与えることとなり、情報検索の進展を媒介とする図書館の相互利用を10年間に倍化させ（例、学外文献複写依頼：589件〔1986年〕→1,051件〔1996年〕）、目録検索をカードからOPACへと移行させ、図書館は本格的なカードレス時代へと突入した。

こうした中で、1996年７月学術審議会の「大学図書館における電子図書館機能の充実・強化について」の建議が行われ、工学部分館はこれまでの近代化の実績を踏まえた一層の機能強化を期待されるに至った。

自然科学系図書館への飛躍をめざして

1984（昭和59）年、金沢大学総合移転実施特別委員会は附属図書館の新営構想を承認し、総合移転第二期において、工学部分館を母体とした自然科学系図書館の建設が目指されることになった。しかし、工学部では移転決定の翌年（1980年）から施設整備要求の自主規制が続いているため、施設の狭隘化が大きな問題となり、特に図書分館の現状は深刻となっている。「文部省の建物面積基準によれば当分館の施設は43%を満たすのみである。　―中略―　1992年度における利用対象学生数に対する閲覧座席数比は4.4%で、全国平均の11.0%である。書庫はすでに収蔵能力を超え、２万７千冊余りの所蔵図書を中央図書館に移管したにもかかわらず数年後には限界となる状況にある。」（金沢大学工学部『工学研究科教育・研究の現状と課題』第１号）という記述がそれを端的に示している。こうした窮状は1997（平成９）年を迎えて、ついに分館資料の一部を箱詰めせざるを得ないところにまで追い込まれた。

一方、工学部の移転日程がようやく煮詰まり、1992年、自然科学系図書館検討小委員会が図書館委員会の下に発足した。工学部図書委員会は1994年、この問題を討議し、工学部の意見を小委員会に上申した。1997年に入ると、小委員会の下にワーキンググループが発足し、自然科学系図書館新営の取り組みは本格的段階に入っている。新営図書館は工学部、理学部、薬学部、がん研究所、自然科学研究科の５部局を中核とした最新鋭の電子図書館を目指している。スタッフ確保や管理運営問題など越えなければならない課題はまだ山積みしているが、この図書館を21世紀の初頭を飾るにふさわしいものにしたいと、いま関係者の懸命な努力が続けられている。

（３）薬学部図書室

1949（昭和24）年５月、金沢大学が創設され、その１学部として薬学部が金沢医科大学附属薬学専門部を母体に設置された。それまで金沢医科大学図書館の下にあった図書室は、金沢大学附属図書館の下に薬学部分室として発足した。

木造の薬学部本館校舎が古くなり、図書室も狭隘で増加する図書の重量にも心配があるため、1956（昭和31）年11月、学部創立八十五周年記念事業として同窓会の寄付金を基に教育学部附属木造建物を移築改造して、独立の図書館を建設した。ところが翌1957年５月５日、薬学部本館から出火し、本館一棟を焼失した。幸いにも図書及び学術雑誌は前年に完成した図書館に移転を終えていたので、被災を免れた。

薬学部校舎の再建工事は、1958年９月から始まった。1963年11月、第３期工事の完成後、図書室は図書の管理や利用面での利便性を考慮して鉄筋校舎の２階に移転した。さらに1967年、薬学部新営工事全体が完成した後、薬学部本館４階に移転した。1985（昭和60）年４月、附属図書館に事務部課制が導入され、各分室を学部図書室に変更した。これに伴い薬学部分室は薬学部図書室となった。現在、職員２名が常駐し、専門図書約

27,000冊、学術雑誌約500種類を管理・運用している。

文庫案内

『北条文庫』

北条文庫は、明治・大正期における教育家であった、北条時敬（ほうじょうときゆき）氏が1927（昭和２）年に蔵書６千数百点、１万５千冊余を広島高等師範学校、第四高等学校、石川県立図書館、日本青年館、前田侯爵家、宮城県立図書館、日本棋院等へ分割寄贈され、そのうち第四高等学校が受贈したものを金沢大学へ引き継いだものである。

文庫の内訳は、写本が半数以上を占め375点1,001冊、木版本85点388冊、洋活字本153点297冊、その他７点47冊計620点1,729冊である。

北条先生は、1858（安政５）年３月23日金沢池田町で出生、1885（明治18）年７月東京帝国大学理学部数学科卒業、同年石川県専門学校教諭を振り出しに、第四高等中学校・第一高等中学校・山口高等中学校教諭を歴任、1896（明治29）年６月山口高等学校長に任ぜられ、その後、第四高等学校長、広島高等師範学校長、東北帝国大学長、学習院長を歴任され、1920（大正９）年４月退官、同年６月貴族院議員に勅撰され、1929（昭和４）年４月27日東京府王子町原宿の自邸で、72才をもって逝去。

先生は数学者であったが、古書の収集保存には熱心で、歴史・地理に関するものが多く、近世資料として貴重なものが多い。なかでも力をいれて集められたものは写本であり、自ら筆写されたものも多数ある。入手されたものは必ず通読され、同書の異版異筆を旧蔵書あるいは図書館本と対校し、誤字・脱字を訂正し、楷書、片仮名、漢字等で読み方を付けるなど、きわめて丹念に校合、書き入れを職務を終えた後、夜半から明け方にかけてなされたということである。

また、先生は、多くの逸話を残された方でもある。その中の二、三を紹介しよう。日本棋院への蔵書寄贈でも想像できるように、囲碁を最も愛好された。腕前は素人二段位であったようだが、相手方の有無に関せず往々明け方まで端座、悠々として碁盤に対し、一睡されず、全く平常のように登校、教鞭をとられたということである。

謡曲にも熱心で、米林献吉、寺尾貞吉氏等に師事された地拍子の腕前は達者であり、決して艶のある美声ではなかったが渋味のあるどっしり巾のある謡い振りが仲間内でも評判であったらしい。先生の蔵書印「江月照松風吹」は謡曲「弱法師」の一節であるが、このことからも宝生流の達人であった先生の片鱗を示すものである。

6　図書館機能の整備とサービスの充実強化

建物の規模や設備が大幅に改善された新図書館に求められるものは、大学の教育研究機能の深化・高度化の進行に対応できる図書館機能の整備と、図書館サービスの充実・強化であった。折しも1993（平成５）年12月に学術審議会から「大学図書館機能の強化・高度化の推進について」の報告が出され、急速に進展する全国的な学術研究情報ネットワークや学内LANを活用した大学図書館機能の強化・高度化を図るよう課題と方策が提示された。

本学図書館では、1995年２月、図書館委員会で附属図書館事業計画を策定した。この計画は当面の重点課題として、第１に図書資料の整備、第２に学術情報提供機能の強化、第３に広報活動の強化、第４に図書館施設整備の充実を図ることを内容とするもので、これまでの整備と併せ、順次具体化が図られることになった。以下に角間地区移転後の図書館機能と図書館サービスの整備・強化について述べる。

（1）大学図書館サービスシステムの充実

1993年４月から学術情報センター検索サービス（NACSIS-IR）からの図書館間相互協力システム（ILL）申込機能のサービスを開始した。これによりNACSIS-IRの検索を通して文献複写・現物貸借の依頼ができるようになった。また、1995（平成７）年２月にはNACSIS-ILLを介してオンラインでBritish Libraryに文献複写依頼をすることができるようになり、それまで１ヵ月近くかかった文献の入手期間が１週間に短縮された。

図書館文化講演会の開催

1993年の６月から翌年１月にかけて「図書館文化講演会」が図書館AV室で開催された。中山茂神奈川大学教授「これからの日本と大学」（第１回）、中西進国際日本文化研究センター教授「日本人の死生観」（第２回）、田仲一成本学文学部教授「中国の農村演劇について」（第３回）、平川祐弘東京大学名誉教授「ハーン、百年後の解釈」（第４回）という講師と演題で、図書館の文化活動として好評であった。

一般市民への開放

1989（平成元）年２月９日開催の図書館委員会で、金沢大学附属図書館中央館一般市民等利用内規が承認された。これまでも一般市民などから学術に係る学習や研究調査を目的とした大学図書館の利用について要望が出されていたが、社会全体の生涯学習の気運の

盛り上がりの中で、制度として確立された。1997年２月には金沢市立図書館と相互協力の覚書きが調印され、また同年11月には石川県立図書館と共催して展示会を実施するなど、一般市民への開放が更に前進した。

（２）マルチメディア・コーナーの充実

1994年３月、金子曾政名誉教授の寄贈によって、マルチメディア・コーナーの設備とソフト（映像資料のビデオ・LD、音声資料のCD、カセット・テープ、電子ブック）の充実が行われた。これを記念して「マルチメディア・コーナー」から「金子記念マルチメディア・コーナー」に名称を変更した。その後もマルチメディア資料の充足と設備の拡充が進められ、利用は急速に増加した。

（３）資料の遡及入力事業と学生サービスの向上

1988（昭和63）年に図書館電算化システムが導入され、図書目録データベースの作成が開始された。これによりデータ入力された資料は、OPAC（オンライン利用者目録）で検索ができるようになった。しかし、それまでに蓄積された図書館資料の検索はカード目録に頼らざるを得ず、学内LANを利用して各研究室からも検索ができるよう遡及入力の早期実現が求められていた。1995（平成７）年１月、教育研究特別経費の配分を受けて、遡及入力専用パソコンの設置などの環境を整え、1995年度から５名の入力要員を採用して本格的に遡及入力作業を開始（第１期は1998年度までの４年次計画で22万冊入力予定）した。

シラバス対応図書の整備

1996年度に本学全学部のシラバス（授業計画）が作成されたことに伴い、シラバスに収録されている教科書・参考書を図書館に収集し、学生がこれを利用して学習の効果を上げるための学習環境を整備することが、図書館委員会で承認された。これにより未所蔵の約2,000点が開架書架に配置された。購入経費は文部省指定配分予算（学生用図書購入費）と学内予算措置で賄われた。次年度以降も図書館の重点課題として整備が継続された。

留学生に対するサービス

年々増加する外国人留学生に対して、留学生図書コーナーの充実、英文利用案内の作成、留学生対象のオリエンテーションの実施など、利用環境の整備を図ってきた。1996（平成８）年３月には、中央館TV・FMコーナーに新たにCNN放送の放映を開始し、これを利用して留学生・外国人研究者が自国情報を入手でき、また日本人学生にとっては語学学習に役立てることができるようにした。

図書館システムの整備

図書館電算化システムは、1991（平成３）年11月と1995（平成７）年11月に更新を行い、学内LANへの接続、性能アップと端末台数の増設を行った。

学内LANの整備に伴い、1994年３月、医学部分館にCD-ROMサーバーが導入され、MEDLINE CD-ROMの検索サービスが開始された。また、1996年３月から中央館でもCD-ROMサーバーが稼動した。

1996年４月、中央館検索コーナーにインターネット専用端末機“iBOX”が２台設置され、だれでも簡単に接続して各大学や企業などが発信する情報入手などインターネットの世界を体験できるようになった。

（4）広報活動・休日開館

図書館報『こだま』は、各種情報サービスの利用方法など利用者に役立つ記事を載せ、紙面も親しみが持てるよう改善を図った。館報速報版『ひかり』では新規受入資料の紹介や行事の案内を行っている。『利用案内』や『図書館概要』の発行に加え、1996年度から附属図書館のホームページを開設し、インターネットによる図書館の各種案内などを公開した。また、図書館活動の点検・評価については、1993年度と1997年度に発行の『金沢大学：現状と課題』に「学術情報システム」として１章を設けて報告した。

想い出の記

図書館と私　　元図書館事務長　大橋　秀二

金沢大学が創立50周年を迎えることを聞き、感無量の思いを禁じ得ない。私は創立の前年、1948（昭和23）年に旧制金沢医科大学に奉職し、新制大学創設とともに歩んできたので、一層その思いが深い。附属図書館と私は、一般事務職でありながら意外と縁につながれている。まず最初のつながりは、1952（昭和27）年から２年間庶務係長として勤務、次に1969（昭和44）年から７年間事務長として長期間勤続したのは、庶務係長として在籍していたとき。図書館で北陸地区の図書館関係者を対象とした司書講習が行われ、私は正直言って図書館の仕事にはあまりなじめなかったが、図書館に勤務する以上、司書の仕事を知っておく必要があると思って受講し、司書補の資格を得たことにあると思う。そういった経歴から、私の他大学への転出希望調査のあった時期と、前任図書館事務長の退職とが重なって、私の図書館事務長が決まったように聞かされた。1969（昭和44）年と言えば学生運動の真っ直中で、投石による窓ガラスの破損もあり、図書館も占拠される恐れがあると思われ、当時の宮孝一館長の指示で図書館を閉館し、館員の手で出入口を封鎖し

1996年７月の前期試験期間中に、土・日曜及び祝日の休日開館が試験的に実施され、翌年度からはこの期間中の休日開館は予算措置が行われ本番実施となった。

1995年１月に起きた阪神大震災で被災した関西地区の大学生に対して、閲覧、文献複写サービスを行うことを広報し、便宜を図った。また、神戸大学附属図書館へ支援のため職員１名を派遣し、復旧活動に従事した。

7　図書館の行事

（1）暁烏文庫古典講座・暁烏記念事業

附属図書館が設置され、開催された講座・セミナー・シンポジウムなどの中で最初に行われたのがこの古典講座である。1950（昭和25）年９月30日付け「暁烏文庫古典講座について」の案内パンフレットによると、

主催：金沢大学図書館・石川県教育委員会・金沢大学暁烏文庫協力会

内容：人文科学・社会科学・自然科学の中の世界的な古典についての入門的解説

講師：金沢大学教授・助教授・講師など

た。この年のもう一つの大きな事柄は定員削減だった。1969（昭和44）年に第一次として２名の削減を言い渡された。ただでさえ少ない人員の中から２名も割かれては、図書館の日常業務が成り立たない。何とかしなければと、いろいろ悩み抜いた末考えついたのが、城内キャンパスの学部にある図書館の４分室を本館に統合して省力化を図る案であった。しかし、この案は各学部の反対に遭い、長期間にわたって議論したが、ついに日の目を見るに至らなかった。

このほか、今でも時折思い出すのは、図書館報『こだま』の発刊である。『こだま』はニュース性を持たすため、原則として毎月１回発行する。縦書きでB５判４頁又は６頁とする。図書の新着案内は毎号載せる事。各学部教官から毎号図書に関する随想の寄稿をお願いすることなどを決めた。第３号までは館長が編集されたが、第４号からは私が編集することとなった。毎月発行するのは、大変な仕事であることを痛感。年10回が限度であった。『こだま』の名称は、発行された館報を読まれた人達からこだまのように読後の感想が寄せられたり、図書館利用が増えることを期待して名付けたものである。『こだま』が今なお、発刊されていることを知って嬉しく思っている。

会場：金沢大学図書館
日時：毎週土曜日午後２時から４時まで
会費：１講座（１ヵ月４回）につき10円

となっている。ちなみに、1950年度の講座題目は、次の５講座である。

①万葉集／窪田敏夫・10月７日、14日、21日、28日。
②カンタベリー物語／梶圭之助・11月４日、11日、18日、25日。
③日本医学史／荒尾正明・12月２日、９日、16日。
④生物進化論／日比野信一・1951（昭和26）年１月３日、２月10日、17日、24日。
⑤ベートーベン講話と観賞／佐々木宣男・４月７日、14日、21日、28日。

以上、延べ19回行われたが、毎回約30名の参加があり、最も多いときには60名を数えた。

1950年４月29日に記念式典が行われた。式典席上、戸田学長が、大学ではこの日を暁烏記念日として毎年講演会を開くことを提案して賛成を得、この年の９月30日、10月１日の両日暁烏文庫記念講演会を開き、武者小路実篤、藤岡由夫、暁烏敏を招いた。講演会は今に続けられて文化の向上に資している。1997（平成９）年４月21日開催をもって48回を数える。

（２）金沢大学附属図書館シンポジウム

第１回は1995（平成７）年11月21日「これからの大学図書館を考える」というテーマで５名のパネリストから、デジタル図書館の設計、理系の研究・教育の観点から、文系の研究・教育の観点から、留学生の学習支援の観点から、公共図書館の観点から、それぞれ提言があった。

第２回は1996年11月21日「新しい情報環境と大学図書館」のテーマで開催された。井上如（学情センター教授）による「新しい学術情報環境と大学図書館」基調講演の後、４名のパネリストによるディスカッションがなされた。

第３回は1998年３月10日「大学図書館活動に係る自己点検評価」というテーマで渋川雅俊（慶応義塾大学）、大口勇次郎（お茶の水女子大学附属図書館長）両教授の講演の後、金沢大学附属図書館事務部を交えてパネルディスカッションがなされた。

第４回は1998年10月23日「研究成果流通と大学図書館」をテーマに内藤衛亮（学術情報センター教授）、越塚美加（学習院女子大学助教授）両講師の講演があり、学内の人文社会系研究者、自然科学系研究者からの意見発表の後、パネルディスカッションがなされた。

文庫案内　　『鈴木文庫』

鈴木直治先生の蔵書が、1994（平成６）年に故人の遺志にしたがって図書館に寄贈された。約５千冊の図書は、すでに整理を終え利用に供している。

蔵書の根幹をなすのは、中国古代の漢語の語法研究に関する文献である。これは先生の主著『中国古代語法の研究』（汲古書院）と『中国語と漢文－訓読の原則と漢語の特徴』（光生館）の資料となった文献である。この中には、戦後間もなく出版され、今日では、もはや手に入らぬ本が少なくない。これらの本は入力されると、すぐに学内外の研究者から利用の申し出があり、利用に供されている。

先生は1910（明治43）年秋田県に生まれた。東京帝大文学部支那哲学支那文学科を卒業され、旧制一高講師を経て、1941（昭和16）年第四高等学校教授として金沢に着任された。戦後の学制改革で金沢大学教授となり、1976（昭和51）年停年で退官され、名誉教授に推薦された。退官後も、なお研究を続けられたが、1992（平成４）年逝去された。82才であった。

先生の蔵書は中国古代語法の研究の領域において、よくまとまっており、内容が充実している。これらの書物は、主として戦後の日本の人の生活が貧しかった時期に集められた。手に入りにくい本や、高価な本は複写されている。古版本と木版の善本や古写本などは初めから集める興味はなかったようである。我が国で出版された大分の漢文の註釈書は、すべてバラで必要な巻だけが揃えてあり、叢書の全巻を購入しようとはされなかった。『皇清経解』『四部叢刊』（正・続輯）などの叢書は揃っているが、これらのすべてが、中国と台湾で戦後に出版された縮印本である。

これについて先生が『四部叢刊』の正輯を購入された時の話を思い出す。「今度求めた本は一頁に四頁を縮刷したので、全部で百巻になります。もとの本は、とても個人の書庫には入りませんが、この洋装本なら四段か五段の本棚に収まります」と顔をほころばせておられた。先生は老年になっても快活な気分を失われず、万年青年で旧制高校生を大人にしたような感じがあった。また、一面では、おしどり夫婦で散歩や外出は一緒であった。散歩も景色をたのしみ、古跡や旧物を訪ねることは第二で、万歩計を腰につけて、今日は「何歩」歩いた、これで合計「何歩」歩いたと計量的であった。これは『中国古代語法の研究』のための語彙のカードを、左伝、荀子、荘子、韓非子、国語、戦国策、史記からコツコツと書きぬきのカードがふえていくのを満足しておられるのと似ていた。

附　録

『1950（昭和25）年度金沢大学総覧』（1950年10月１日現在）よると、図書館関係の諸規程で最初に制定されたのは、下記の図書館規程及び図書館委員会規程である。

金沢大学図書館規程

第一条　金沢大学図書館は金沢大学所属図書及び図書館所属の物品の管理に当たる。

第二条　金沢大学図書館に左の分館及び分室を置く。

一、医学部分館（附属病院及び結核研究所を含む）

二、工学部分室

三、薬学部分室

四、法文学部分室

五、理学部分室

六、教育学部分室

七、高等師範学校分室

八、実験学校分室

第三条　本図書館に館長及び分館長を置く。

第四条　本図書館に図書館委員会を置く、その規程は別に定める。

第五条　本図書館の管理する図書を分けて下記の二種とする。

一、貴重図書及び特殊図書

二、普通図書（定期逐次刊行物の完冊を含む）

第六条　貴重図書及び特殊図書は所定の場所に蔵置し、その取扱に関しては別に規程を設ける。

第七条　分館又は分室の図書を移動する場合は関係の図書館委員間の了解及び図書館長の承認を受けることを要する。

第八条　図書を寄託しようとするものがあるときは図書館委員会の議を経てその求めに応ずることが出来る。

以上のとおりで、規程番号・施行月日の記述がない。

金沢大学図書館委員会規程（規程18号）

第一条　金沢大学図書館に図書館委員会（以下委員会という）を置く。

２　委員会は図書館に関する左の事項を審議する。

一、規程の制定及び改廃

二、予算その他運営上重要な事項

三、学長が諮問した事項

四、図書館長が提議した事項

五、委員が提議した事項

第二条　委員会は委員長、副委員長及び委員をもってこれを組織する。

2　委員は各学部教授会においてその教授又は助教授の中から二名を選定し、学長がこれを委嘱する。その任期は二年とし重任をさまたげない。

3　補欠委員の任期は前任者の残任期間とする。

第三条　委員長及び副委員長は委員が互選する。

2　委員長は委員会を招集しその議長となる。

3　委員長に事故あるときは副委員長が之に代る。

第四条　委員会は書記を置く。

2　書記は委員長の命を受け委員会の事務に従う。

3　書記は委員長が図書館長と協議し図書館職員中からこれを委嘱する。

第五条　図書館長又は委員二名以上の請求があるときは委員長は委員会を招集しなければならない。

第六条　委員会は委員の過半数の出席がなければ成り立たない。

第七条　議事は出席委員の過半数をもってこれを決する。可否同数のときは議長の決するところによる。但し重要な議事については議決により三分の二以上の多数をもって決する。

第八条　図書館長は委員会に列席する。

第九条　議長は必要ありと認めるときは本学職員に委員会の席上でその意見を求めることができる。

第十条　委員会には議事録を備え、左の事項を記載しなければならない。

一、開会の日時及び場所

二、出席者の氏名

三、議事の要領

2　議事録は当日の議長及び出席委員中一名の確認を得なければならない。

附　　則

この規程は昭和二十五年五月二日から施行する。

その後「図書館規程」は、参考、相互協力、複写サービス等図書館業務の多様化にともない1965（昭和40）年11月改正され、1972（昭和47）年11月工学部分館設置等により再度改正（規程320号）された。

出版物

①『暁烏文庫仏教関係図書目録』

（1963年３月）

②図書目録

『金沢大学図書目録　1962年度～1981年度』

『政治法律関係図書目録　1956年10月末現在』
『政治法律関係参考図書目録　1960年１月31日改定』
『指定図書目録　1969年度～1971年度』『1973年度』
『北条文庫目録（金沢大学附属図書館目録叢刊第１集）』
（1976年１月）
『和田文庫目録（金沢大学附属図書館目録叢刊第２集）』
（1977年３月）
『金沢大学附属図書館郷土資料目録　1983年９月30日現在』
（金沢大学附属図書館目録叢刊第３集）
（1984年３月）

③逐次刊行物目録
『金沢大学雑誌目録　欧文篇　1955』
（1957年３月）
『学術雑誌目録（本館・法文学部・教育学部）　1961年10月31日現在』
（1962年２月）
『金沢大学所蔵逐次刊行物総合目録　和文篇　1979年３月末現在』
（1979年10月）
『金沢大学所蔵逐次刊行物総合目録　欧文篇　1979年９月末現在』
（1980年２月）
『金沢大学所蔵逐次刊行物総合目録　1981年版』
（1981年12月）
『金沢大学欧文雑誌一覧　1962』
『金沢大学継続受入雑誌所在目録　1973』

④広報
『図書館案内』
1965～1988年
『図書館利用案内』
1989／1990～1997年
『User's Guide to the Kanazawa University Central Library』
1993年、1997年
『こだま：金沢大学附属図書館月報』
第１号（1970年４月）～第125号（1997年４月）
『図書館概要』
1965年度、1975年度、1979年度、

1981年度、1992／1993年度、
1995年度、1997／1998年度

職員

（1）歷代附属図書館長

初代	神保　龍二（法文・教授）	1950（昭和25）年1月～1952年 1月
2	小原　度正（法文・教授）	1952（　27）年1月～1957年12月
3	増井　經夫（法文・教授）	1958（　33）年1月～1963年 1月
4	石橋　雅義（学長・事務取扱）	1963（　38）年2月～1963年11月
5	松山　昇（理・教授）	1963（　38）年12月～1967年 4月
6	清水忠次郎（教養・教授）	1967（　42）年5月～1969年 4月
7	宮　孝一（法文・教授）	1969（　44）年5月～1973年 3月
8	新谷賢太郎（教育・教授）	1973（　48）年4月～1975年 3月
9	木羽　敏泰（理・教授）	1975（　50）年4月～1977年 3月
10	木戸　睦彦（教養・教授）	1977（　52）年4月～1979年 3月
11	松山　昇（理・教授）	1979（　54）年4月～1981年 3月
12	進藤　牧郎（経済・教授）	1981（　56）年4月～1983年 3月
13	堀　尚一（理・教授）	1983（　58）年4月～1985年 3月
14	柴原　正雄（工・教授）	1985（　60）年4月～1986年 3月
15	金崎　肇（文・教授）	1986（　61）年4月～1988年 3月
16	瀬嵐　哲夫（教育・教授）	1988（　63）年4月～1990年 3月
17	玉井　龍象（経済・教授）	1990（平成 2）年4月～1992年 3月
18	島田　昌彦（文・教授）	1992（　4）年4月～1994年 3月
19	小堀　為雄（工・教授）	1994（　6）年4月～1996年 3月
20	橋本　哲哉（経済・教授）	1996（　8）年4月～現在

（2）歷代医学部分館長

初代	佐口　栄	1950（昭和25）年5月～1954年 4月
2	井上　剛	1954（　29）年5月～1967年 3月
3	山田　致知	1967（　42）年4月～1973年 3月
4	何川　涼	1973（　48）年4月～1977年 3月
5	西田　尚紀	1977（　52）年4月～1983年 3月
6	米山　良昌	1983（　58）年4月～1988年 3月
7	根岸　晃六	1988（　63）年4月～1992年 3月
8	橋本　和夫	1992（平成 4）年4月～1994年 3月
9	福田　龍二	1994（　6）年4月～1996年 3月

10　田中　重徳　　1996（　　8）年4月～1998年 3月
11　中村　信一　　1998（　　10）年4月～1998年 9月
12　中沼　安二　　1998（　　10）年10月～現在

（3）歴代工学部分館長

初代　石橋　鐐造　　1972（昭和47）年12月～1974年 3月
2　須賀　操平　　1974（　　49）年3月～1976年 3月
3　山本　外史　　1976（　　51）年4月～1980年 3月
4　田中久一郎　　1980（　　55）年4月～1982年 3月
5　谷本　　明　　1982（　　57）年4月～1984年 3月
6　石田真一郎　　1984（　　59）年4月～1986年 3月
7　尾田　十八　　1986（　　61）年4月～1988年 3月
8　渡辺　一郎　　1988（　　63）年4月～1990年 3月
9　金岡千嘉男　　1990（平成 2）年4月～1992年 3月
10　新濃　清志　　1992（　　4）年4月～1994年 3月
11　新宅　救徳　　1994（　　6）年4月～1996年 3月
12　上野　久儀　　1996（　　8）年4月～1998年 3月
13　岡島　　厚　　1998（　　10）年4月～現在

統計

年度	入館者数	館外貸出冊数	相互協力サービス(現物)		相互協力サービス(文献複写)		蔵書冊数
			貸出	借受	受付	依頼	
	人	冊	冊	冊	件	件	冊
1954（昭和 29）	—	26,205	—	—	—	—	391,286
57（昭和 32）	—	29,666	—	—	—	—	424,653
62（昭和 37）	—	23,855	—	—	—	—	455,584
67（昭和 42）	—	32,075	17	45	—	—	556,237
72（昭和 47）	285,326	53,889	236	297	4,437	1,098	691,774
77（昭和 52）	248,706	46,585	30	112	4,567	2,239	832,329
82（昭和 57）	338,463	63,324	242	170	7,847	4,059	1,010,248
87（昭和 62）	373,226	73,562	799	544	5,187	4,770	1,180,349
92（平成 4）	433,009	66,255	307	330	5,702	5,042	1,342,408
93（平成 5）	485,396	77,544	268	469	9,143	6,375	1,369,512
94（平成 6）	617,257	83,022	402	587	11,441	10,197	1,400,352
95（平成 7）	596,498	82,573	483	841	15,409	10,641	1,427,498
96（平成 8）	591,989	82,885	511	884	14,657	11,174	1,459,343

金沢大学附属図書館略年表

＊は関連する全学事項
＃は関連する全国事項

西暦	年号	月	日	事項	出典	該当頁	備考
1948	昭和23	5	31	＊金沢大学設置認可申請書が提出された。 金沢大学設置要項6で図書315,844冊。	十年史	3	
48	昭和23	11	16	＊大学設置委員の実地調査があり、大学の創設に当たって(2)社会科学関係の図書を増強すること。との条件が付された。	事務通報1-10	6	
49	昭和24	1	1	［金沢大学］附属図書館設置準備委員会設置（委員長：神保龍二四高教授、副委員長：大沢衛四高教授）	十年史	103	
49	昭和24	5	31	＊国立学校設置法の公布により、金沢大学が創設。附属図書館設置。 金沢医科大学附属図書館及び第四高等学校、金沢工業専門学校、金沢高等師範学校、石川青年師範学校、金沢医科大学附属薬学専門部の各図書館を包括統合し、中央館、医学部分館、工学部分室、教育学部分室、理・法文学部分室、薬学部分室、金沢高師分室が設置された。中央館は暫定的に教養部に置かれた。	図書館概要	2	
49	昭和24	9	1	本館で閲覧業務開始。	十年史	103	
49	昭和24	10	1	本館で館外貸出業務開始。	十年史	103	
50	昭和25	1	4	法文学部神保龍二教授、附属図書館長に発令	十年史年表	136	
50	昭和25	3	28	四高閉校記念蔵書展			
50	昭和25	4	29	暁烏文庫を受贈。金沢大学暁烏文庫委員会規定が制定された。 この年から古典講座、聖典講座を開講。	大学教育開放センター紀要10	2	
50	昭和25	4	30	暁烏文庫図書室（教育学部図書閲覧室）が竣工。	事務通報1-2	14	
50	昭和25	5	2	金沢大学図書館委員会（規定18号）が制定された。			
50	昭和25	8		中央館は暁烏文庫図書室内に閲覧室、事務室を移転、三十間長屋を書庫として開館。	図書館概要	2	
50	昭和25			金沢大学図書館規程（規程第22号）が制定された。	事務通報2-1	3	
51	昭和26			暁烏文庫記念論文の募集が始まった。			
52	昭和27	3	31	金沢高等師範学校の廃止に伴い、高師分室は本館に統合。			
52	昭和27	11	26	＃国立大学図書館改善要項及びその解説（国立大学図書館改善研究委員会）が公表された。			
53	昭和28	3	10	金沢大学図書館暁烏文庫社会教育研究室規定が制定された。	事務通報4-3 大学教育開放センター紀要10	6 3	

				この年から世界講座を開講。		
53	昭和28	10	1	金沢大学図書館閲覧規定（規定第38号）が制定された。	事務通報4-11	1
53	昭和28	12	1	金沢大学図書会計規定細則（規定第39号）が制定された。	事務通報4-12	1
55	昭和30	9		「駒井文庫」が寄贈された。	こだま7	3
56	昭和31	3	16	マイクロ複写装置（ルーモプリント社製）医学部電子顕微鏡室で業務開始。	事務通報7-5	7
57	昭和32	5	5	＊薬学部一号館から出火、全焼。	事務通報8-5	2
57	昭和32	6	4	金沢大学図書会計規定細則（金沢大学規定第39号）廃止。	事務通報8-6	4
58	昭和33	2	21	第91回評議会において金沢大学図書充実委員会の設置について協議。	事務通報9-3	1
58	昭和33	4	20	暁烏総氏から暁烏文庫記念論文募集事業の資金として10万円寄付、感謝状を贈呈。	事務通報9-5	8
59	昭和34	3	1	金沢大学附属図書館マイクロ複写取扱内規が制定された。	事務通報10-4	2
59	昭和34	8	1	金沢大学附属図書館マイクロフィルム撮影取扱規定が制定された。	事務通報10-11	1
59	昭和34	10	23	金沢大学附属図書館長選考規定（規定第75号）が制定された。		
60	昭和35	4	1	附属図書館司書係が目録係と閲覧係に分離。	図書館概要	2
60	昭和35	10		第7次全国国立大学図書館長会議の会場館となった。	図書館概要	2
61	昭和36	7	26	暁烏総氏から論文表彰基金100万円寄付、感謝状を贈呈。	事務通報12-8	4
63	昭和38	3	25	『暁烏文庫仏教関係図書目録』を刊行した。		
64	昭和39			学内措置により指定図書制度を試行。	こだま5	5
64	昭和39	2	29	『金沢大学図書目録昭和37年度』を刊行した。		
64	昭和39	4	1	＊教養部が設置された。		
64	昭和39	4	30	理学部校舎が金沢城内に竣工、理学部分室も同学部内に移転。		
64	昭和39	9	1	中央図書館新営工事（R3.717坪）起工式挙行	事務通報15-9	4
65	昭和40	4	16	中央図書館新営工事の竣工式挙行。	事務通報16-6	5
65	昭和40	11		図書館職員による研究会開始（NCR1965年版・図書の不要決定等）。		
65	昭和40	11	19	金沢大学附属図書館規定（規定第160号）が制定された。	事務通報16-12	5
				金沢大学附属図書館閲覧規定（規定第161号）が制定された。	事務通報16-12	5
66	昭和41			図書館概要を刊行した。		
66	昭和41	3		＃大学図書館施設計画要項（文部省監理局教育施設部）が取りまとめられた。		

66	昭和41	6	10	金沢大学附属図書館本館閲覧規定細則が制定された。		
67	昭和42	3	28	大学図書館視察員の視察結果「改善充実について」通知。		
67	昭和42	9	1	金沢大学附属図書館文献複写規定が制定された。	事務通報18-9	1
				薬学部の宝町移転に伴い、薬学部分室も同学部内に移転した。	図書館概要	2
68	昭和43			この年から「古典セミナー」を開講。		
69	昭和44			文部省予算による指定図書制度（教養部分）を開始。	こだま5	5
69	昭和44	4	1	教養部分室、法文学部分室が設置された。		
				目録係が第一整理係と名称変更、第二整理係が新設された。	図書館概要	2
69	昭和44	9	27	故和田三良教授の旧蔵書寄贈に対し、紺綬褒章が授与された。		
69	昭和44	9	29	学園紛争のため中央図書館をロックアウトする。	大橋メモ	
69	昭和44	11		医学部分館が竣工（45年6月開館）。		
69	昭和44	12	23	工学部管理棟の竣工式挙行。	こだま21	1
70	昭和45	7	20	「図書館資料の不要決定および廃棄の基準」が制定された。		
70	昭和45	9	10	金沢大学附属図書館月報『こだま』が創刊された。		
70	昭和45	11	23	附属図書館増築竣工式を挙行。	こだま5	2
71	昭和46	5	20	臨時貴重図書調査員を委嘱した。	こだま9	1
71	昭和46	11	11	マイクロフィッシュ撮影業務開始。	こだま13	2
71	昭和46	12		故三戸寿教授の旧蔵書を受贈。	こだま14	1
72	昭和47			＊医療技術短期大学部（併設）が設置された。		
72	昭和47	10	1	金沢大学附属図書館規定（規定第320号）が制定された。	事務通報24-1	4
				工学部分館が設置された。	こだま21	1
72	昭和47	11	10	附属図書館分館長選考規定が制定された。	こだま22	1
73	昭和48	4	13	暁烏文庫委員会規定が制定された。	こだま27	2
73	昭和48	9	11	金沢地区大学図書館協議会が発足した。	こだま30	1
73	昭和48	10		＃学術審議会「学術振興に関する当面の基本的施策」を答申。		
75	昭和50	3		理学部図書専門委員会が理学図書室の統合案をまとめる。		
75	昭和50	4	1	参考係が設置された。		
75	昭和50	7	2	国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会が開催された。	こだま49	1
75	昭和50	10		『昭和50年度金沢大学附属図書館概要』を刊	こだま50	3

				行した。		
76	昭和51	1	20	『北条文庫目録』（金沢大学附属図書館目録叢刊第1集）を刊行した。		
76	昭和51	4	30	『古医書目録』を刊行した（医学図書館）。		
76	昭和51	10	24	＊金沢大学将来計画検討委員会が設置された。	事務通報28-1	3
77	昭和52	3	25	『和田文庫目録』（金沢大学附属図書館目録叢刊第2集）を刊行した。		
77	昭和52	12		＊情報処理センターが設置された。		
79	昭和54	7	30	金沢大学附属図書館機械化プロジェクトチーム発足	こだま58	2
79	昭和54	9	1	医学部分館の改装完了。	こだま59	2
79	昭和54	10	1	『金沢大学所蔵逐次刊行物総合目録和文篇』を刊行した。		
79	昭和54	12	21	＊総合移転実施特別委員会が設置された。		
80	昭和55	1		医学部分館でJOISオンライン情報検索サービスを開始。		
80	昭和55	1		＃学術審議会「今後における学術情報システムの在り方について」を答申。		
80	昭和55	2	29	「金沢大学所蔵逐次刊行物総合目録欧文篇」を刊行した。		
80	昭和55	3	26	職員による業務改善委員会がつくられ、図書館業務の集中化、部課長制等について討議した（57年10月第25回まで開催）。		
80	昭和55	4	1	＊法文学部が文学部、法学部、経済学部に分離改組された。		
81	昭和56	12	15	『金沢大学所蔵逐次刊行物総合目録1981年版』を刊行した。		
83	昭和58	3		金沢大学附属図書館事務電子計算機処理検討委員会が発足した。		
83	昭和58	3	15	『金沢大学図書目録第19巻（昭和55・56年度）』を刊行、以後刊行を休止。		
83	昭和58	4		業務改善委員会が部課長制導入についてのアンケート結果を館長に報告。		
83	昭和58	5	27	金沢大学附属図書館事務電算化実務委員会が発足した。	こだま73	1
84	昭和59	3	31	『金沢大学附属図書館郷土資料目録』（金沢大学附属図書館目録叢刊第3集）が刊行された。		
84	昭和59	5	23	図書館委員会の下に附属図書館新営に関する小委員会が設置された。		
84	昭和59	7		図書館専門員が配置された。	図書館概要	3
84	昭和59	9	27	総合移転実施特別委員会の下に資料館検討小委員会が設置された	事務通報号外22	2

84	昭和59	10	23	図書館委員会で「附属図書館の新営構想」が承認された。		
84	昭和59	10	29	＊総合移転整備事業建設工事起工式が挙行された。		
85	昭和60	1	30	図書館委員会確認に基づき図書館長が部課長導入問題で学長に要請。		
85	昭和60	4	1	部課制となり、整理課及び閲覧課が置かれた。文法経、教育、理、薬及び教養部の各分室は図書室となり、各図書室及び工学部分館配置の職員は、組織上中央館各係へ配置換えとなった。		
				第一整理係が和漢書目録係、第二整理係が洋書目録係に名称変更、受入係及び学術情報係が新設された。金沢大学附属図書館利用規定（金沢大学規定第815号）が制定された。	事務通報36-1	7
85	昭和60	5		金沢大学附属図書館業務電算化検討委員会が発足した。		
				附属図書館業務電算化作業班が発足した。		
85	昭和60	11		中央館にEC資料センターが設置された。	図書館概要	3
86	昭和61			暁烏文庫記念論文の募集を中止した。	こだま82	6
86	昭和61	4	1	＃大学共同利用機関として学術情報センターが設置された。		
87	昭和62	4	1	＊大学院自然科学研究科が設置された。		
88	昭和63	2		図書館業務用電算機（FACOM M730/4）が設置され、学術情報センターと接続した。		
88	昭和63	3		附属図書館の建設着工。		
88	昭和63	3	11	資料館設置準備委員会が発足した。		
88	昭和63	4	1	電算機の運用（閲覧業務）が始まった。	こだま91	7
88	昭和63	4		課名が変更され、情報管理課及び情報サービス課となった。		
88	昭和63	5	6	附属図書館業務システム化推進グループが設置された。	こだま91	7
89	平成元	4	1	法文経学部図書室の業務を中央館に統合。和漢書目録係と洋書目録係を目録係と雑誌係に改組された。		
				学術情報係がシステム管理係と名称変更した。	図書館概要	3
				金沢大学資料館規定（金沢大学規定第1003号）が制定された。	事務通報40-1	31
89	平成元	7		附属図書館の新営工事が完成した。		
89	平成元	8	14	新図書館への移転開始。	事務通報40-5	1
89	平成元	10	5	＊総合移転第一次移転部局竣工式が挙行された。	事務通報40-7	2
89	平成元	10	11	中央図書館が開館した。	事務通報40-7	7

				同時に、第一期総合移転期間中の経過措置として、旧中央館（丸の内図書館）も一部継続して開館することとなった。	図書館概要	3	
90	平成 2	1	30	＃学術審議会学術情報資料分科会学術情報部会「学術情報流通の拡大方策について」を審議会総会に報告。			
91	平成 3	11		図書館業務用電算機を（FACOM M730/8）に更新した。	図書館概要	3	
92	平成 4	4		情報管理課に図書館専門員が配置された。	図書館概要	3	
92	平成 4	7		理学部の角間キャンパス移転に伴い、理学部図書室の業務及び職員を統合した。	図書館概要	3	
92	平成 4	8		旧中央館（丸の内図書館）を閉館した。	図書館概要	3	
92	平成 4	9		教育学部の角間キャンパス移転に伴い、教育学部図書室の業務及び職員を統合した。	図書館概要	3	
93	平成 5	9		教養部図書室が角間キャンパスに移転した。	図書館概要	3	
94	平成 6	8		医学部分館にCD-ROMサーバシステムを設置。MEDLINEのオンラインサービスを開始。	図書館概要	3	
95	平成 7	11		図書館業務用電算機を（FACOM M730/10）に更新した。	図書館概要	3	
95	平成 7	11	21	金沢大学附属図書館シンポジウム「これからの大学図書館を考える」を開催した。			
96	平成 8	3		中央館のCD-ROMサーバが稼働した。			
96	平成 8	4		教養部の改組に伴い、教養部図書室の業務及び職員を統合した。			
96	平成 8	11	21	金沢大学附属図書館シンポジウム「新しい情報環境と大学図書館」を開催した。			
97	平成 9	1	23	平成8年度国立大学附属図書館事務部長会議を開催した。			
97	平成 9	4	24	金沢市立玉川・泉野両館と相互協力の覚書を締結。			